

第 10 次長期 5 か年研究推進計画

令和 6 年度 ～ 令和 10 年度

全国へき地教育研究連盟

研究の経緯

全国へき地教育研究連盟（略称：全へき連）は、昭和 27 年 7 月北海道帯広市で開催された第 1 回全国へき地教育研究大会で、各都道府県県有団体の連合研究団体として組織された。

全国大会の第 1 日目は全体会、第 2 日目は帯広市周辺 7 町村の小中学校 8 分科会場で単級（全学年 1 学級 1 教師）、複式学級の 8 教科の公開授業とそれに基づく研究協議、第 3 日は全体会場で全分科会場の授業と研究協議について資料とともに報告が行われた。

ここで、都市に比べ格差の甚だしいへき地・複式・小規模校に学ぶ子どもたちに教育の機会均等を保障したいという思いから、北海道を中心に全国から参加した二千余名の教師の熱い思いの中で「へき地教育振興法の制定要望」が決議された。その後、昭和 29 年国会で「へき地教育振興法」が決議され、学校の施設設備、教材教具、教職員の研修の機会、待遇改善、その他へき地における教育を振興するための諸施策を明らかにし、教育水準向上の法制化がなされ、同年 6 月 1 日公布施行された。

第 2 回全国へき地教育研究大会は、文部省、島根県教育委員会、全へき連の主催で、分科会の公開授業を中心に研究協議が行われ、以降、福井、山梨と回を重ね、昭和 48 年の徳島大会までの 20 年間の前半 10 年間は「教科指導に関する主題」であり、後半 10 年間は「学校・学級経営に関する主題」であった。開催県や分科会場校の多様な課題が研究主題として取り上げられたが、積み上げは見られず、各県独自の研究にとどまる傾向が強かった。また、共同研究として深まりのないことが課題として残された。

課題解決を目指して新しい研究のあり方を模索し、昭和 49 年全へき連の理事会で「全へき連の長い年月にわたる要望が実り、教育条件整備も進んだので、これからの研究活動を組織的、継続的、計画的に進めていく」ことに決めた。これが、今日の長期研究推進計画の始まりである。

1 第 1 回大会（昭和 27 年北海道）～第 22 回大会（昭和 48 年徳島）

この間の約 20 年にわたる研究は、前述したように前半の 10 年間（愛媛大会まで）は、教科指導に関する内容が研究の中心であり、後半の 10 年間（徳島大会まで）は、学校・学級経営に関する内容の研究が多いのが特色である。問題点として研究主題や課題が大会都道府県に任せられ、思い思いに取り上げられたために、微視的であったり巨視的であったりして成果の積み上げが見られなく、また、都道府県の研究にとどまる傾向が強かったため、全国共同研究という兆しが見られなかった。

2 第 1 次長期 10 か年研究推進計画（昭和 49 年東京大会～ 58 年鳥取大会）

○研究主題：「新時代を開発し、主体的・創造的に生きる子どもの育成」

昭和 48 年までの反省の上にたって、昭和 49 年の理事会で研究活動を組織的、継続的、計画的に進めていくことが決定され、今日の長期研究推進計画に基づいた研究がスタートした。「全国は一つ」を合言葉に、共通の研究主題を掲げ各地域の独自性を尊重しつつ、課題別研究、共同研究を柱に年次計画を立てて課題解決を図るものであった。

3 第 2 次長期 5 か年研究推進計画（昭和 59 年山形大会～ 63 年香川大会）

○研究主題：「たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子どもの育成」

第 1 次研究は 10 か年だったが、この時から研究期間を 5 か年とした。時代の迷いや変化に対応するためであり、2 領域 3 分野の課題別研究であった。3 分野とは、

- ①特性を生かした学校・学級経営の創造
 - ②三特性を生かした指導計画の創造
 - ③学習効果を高める学習指導法の創造
- である。

4 第3次長期5か年研究推進計画（平成元年栃木大会～平成5年長崎大会）

○研究主題：「郷土を愛し、たくましい実践力をもって主体的・創造的に生きる心豊かな子どもの育成」

臨時教育審議会、教育課程審議会等の情勢を踏まえ、さらにへき地の変容、地域の要望を配慮し、研究主題や研究内容を設定した。全国の研究が組織的に機能する中で研究が推進された。

5 第4次長期5か年研究推進計画（平成6年石川大会～10年島根大会）

○研究主題：「郷土の未来を拓き、たくましい実践力をもって主体的・創造的に生きる心豊かな子どもの育成」

学習指導要領の4つの柱を踏まえ、へき地の変容を考察し主題を設定した。また、研究の方法は課題別・共同研究を継承した。8研究課題、26研究内容であった。

6 第5次長期5か年研究推進計画（平成11年岩手大会～15年福井大会）

○研究主題：「ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ心豊かな子どもの育成」

完全学校週5日制の下での新教育課程が目指すもの（移行措置も含め）、今後の教育の動向、地域の変貌等を考察し主題を設定した。2分野3課題、24の研究内容で長期・課題別・共同研究方式を継承した。

7 第6次長期5か年研究推進計画（平成16年佐賀大会～20年山梨大会）

○研究主題：「ふるさとに誇りを持ち、新しい時代を拓く心豊かな子どもの育成」

次の時代を担う子どもたちに「ゆとり」の中で「生きる力」を育成するという理念のもと「豊かな人間性」「基礎・基本と個性」「特色ある教育」などやこれまでの研究成果の考察をもとに主題を設定した。2分野6課題、24の研究内容で、長期・課題別・共同研究方式を継承した。

8 第7次長期5か年研究推進計画（平成21年鹿児島大会～25年三重大会）

○研究主題：「ふるさとでの学びを生かし、新しい時代を築く心豊かな子どもの育成」

第6次長期5か年研究推進計画の流れを受け止め、発展させる考えのもとに主題を設定した。2分野6課題、26の研究内容で、長期・課題別・共同研究方式を継承した。

9 第8次長期5か年研究推進計画（平成26年群馬大会～30年京都大会）

○研究主題：「ふるさとで心豊か学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」

第7次長期5か年研究推進計画の流れを受け止め、発展させる考えのもとに主題を設定した。2分野6課題、29の研究内容で、長期・課題別・共同研究を継承した。

以下、第9次長期5か年研究推進計画に基づき開催された全国大会の成果と課題を集約し、今後の教育の動向や地域の教育課題等を考慮して、第10次長期5か年研究推進計画へ反映させる。

第10次長期5か年研究推進計画

I 計画策定の基本方針

第10次長期5か年研究推進計画の策定を以下の基本方針に基づいて行う。

- 1 第9次長期5か年研究推進計画に基づいて開催された各大会の実践研究のまとめをもとに、研究成果と課題について検討し、それらを継承・発展させて作成する。
- 2 研究主題については第9次までの主題を発展的に継承する。
- 3 長期・課題別・共同研究による研究方法を継承する。研究期間は5か年として、年度ごとにPDCAサイクルの考え方で改善を図りながら実践を積み上げていく。前期3か年は本計画に基づいた実践研究を累積しながら検証を進め、後期2か年は実践研究を継承しながら研究を発展させていく。
- 4 研究推進計画の立案にあたっては、関係機関・団体との連携を密にするとともに、全へき連会員の意向を反映させるものとする。
- 5 学習指導要領や新しい教育の動向（中央教育審議会の答申等）を踏まえた、特徴的な課題を反映させる。
- 6 研究内容に関しては、第9次長計を基本とし、以下の項目に着目した研究を推進する。
 - ①知識・技能と思考力・判断力・表現力、学習意欲等のバランスのとれた「確かな学力」の育成と個に応じた指導
（キャリア教育、外国語教育、情操教育、環境教育、特別支援教育、言語活動の充実、プログラミング学習、ICT活用、個別最適な学び、協働的な学び、遠隔授業）
 - ②規範意識を養い、豊かな心を育む教育
（道徳教育、体験活動、生命尊重、自尊感情、人権教育、読書活動、いじめ・不登校等児童・生徒指導）
 - ③健やかな体を育む教育
（健康教育、食育、体力づくり）
 - ④安全・安心な学校づくり
（教員の資質向上・学校評価・防災教育・情報モラル・小中一貫教育）
 - ⑤学校・家庭・地域との連携を強化し、社会全体の教育力の向上
（地域の人材活用、ふるさと教育、社会に開かれた教育課程、コミュニティ・スクール、地域学校協働活動）

II 研究主題

『 主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった
人間性豊かな子どもの育成 』
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

《研究主題の解説》

第9次長計は、これまでへき地教育が取り組んできた「確かな学力」「豊かな人間性」「健やかな体」のバランスのとれた「生きる力」の育成を目標としてきた。あわせて、地域の一員として「ふるさと」から学び「ふるさと」のよさを発信し、「ふるさと」の未来を考える子どもに育ってほしいという願いをこめていた。

一方、社会情勢は、グローバル化、IT技術の加速度的進化、少子高齢化など急激な変化となり、複雑化するとともに世界的な規模の感染症など予測困難な状況からVUCA時代といわれている。このような社会で生き抜いていく子どもたちには、様々な資質・能力が必要である。現行学習指導要領では「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」「課題を解決するための思考力、判断力、表現力」「豊かな心や創造性の涵養」「健康で安全な生活」「豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実」などが求められている。

そこで、これまでの第9次長計の成果と課題を踏まえ、新しい時代の教育を創造的に築き担っていることから、上記の研究主題を設定した。

《主題設定の理由》

○「主体的・協働的に学び」とは

「主体的・協働的に学び」とは、児童生徒が自ら課題を見出し、自ら考え、主体的に判断し行動する力を培うことである。また、分かったことを伝え合い、それらを統合し合うことでより高いものを求める、自ら学ぶ「学びの連続性」を志向することである。

したがって、各学校では、基礎的・基本的な内容と問題解決能力を身に付けることができるようにするとともに、自ら学ぶ意欲を高め、生涯にわたって学ぶ姿勢を育てることが大切である。

そのためには、児童生徒同士の信頼ある人間関係を土台に、児童生徒が相互に意見を発信し、耳を傾け、相互に啓発できる学習環境をつくる必要がある。あわせて、地域社会の中で豊かな自然環境を生かし、体験的な学習や問題解決的な学習を展開していくことも重要である。

それは、児童生徒自身に安心できる居場所があると言うことに他ならない。失敗してもやり直しのできる居場所である。そして、やり直しができるからこそ、自らの学習を振り返ることができるのであり、その繰り返しが自己の学習を確立させていくとともに自己調整力を培っていくことにもつながる。

これから生きる子どもたちには、自分で、あるいは他者と協力して課題解決に向かう力を身に付けるために、その根幹となる「当事者意識」をもち、「自分事」としてとらえる人間力を育んでほしいと願っている。

○「ふるさとへの誇りと愛情をもった」とは

少子高齢化による人口減少など社会が大きく変貌を遂げている中、子どもたちにふるさとへの愛着や誇りを育み、地域社会の一員としてまちづくりに関わり、ふるさとに生きる自覚を涵養することが求められている。特に人口の少ない過疎地においては、将来的に集落が消滅するなど限界集落の問題も深刻化している。

そこで、教育活動全体を通して、子ども自身が自分の生まれ育った地域に関心をもち、地域と関わり、郷土を学び、郷土を愛する心を育むことが求められる。そのために、自

然や文化などの地域の特色ある教育資源を積極的に活用したり、地域人材を活用した学習を展開したりするなど、地域特有の文化や歴史について学習の充実を図る必要がある。

各学校において、地域人材の高齢化等の諸課題はあるが、今以上に学校を地域に開き、地域素材の教材化、人材活用などの自然環境、社会環境を積極的に活用し、これまでの実践において「ふるさと」を舞台にして展開してきた「地域に根ざした教育活動」をより推進する必要がある。

これまで全へい連が積み上げてきた実践研究の根底には「地域に根ざした教育」があり、「ふるさと」を前面にかかげて「ふるさと学習」を中心に研究を深めてきている。

かつて「へき地」を劣性とした時代があったが、今は都市とは違う価値観に基づく「豊かさ」「楽しさ」「やりがい」等が生み出させてきている。

これからを生きる子どもたちには、地域の一員としての意識をもち、「ふるさと」と関わり、「ふるさと」を知り、「ふるさと」を通して学ぶことで誇りと愛着をもつことで、自分の未来を切り拓く人間性を育ててほしいという願いである。

○「人間性豊かな」とは

「人間性」は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力」とともに「生きる力」の根幹をなすものであり、知・徳・体のバランスのとれた全人的な人格形成に必要なものである。現在、社会全体のモラルの低下、大人社会の世代を繋ぐ意識の希薄化等が見られることから、児童生徒の健全な心を育成するためには、家庭や地域社会との連携をより一層深める取組が求められる。

そのためには、道徳教育の充実、学校内外の社会的活動や自然体験活動を促進し、児童生徒自身が「学習者としての当事者」意識をもたせるとともに、個性の伸長、多様な人々との協働を通して「他人を思いやる心」「生命を大切に作る心」などを育成していくことが大切である。

各学校においては、へき地・複式教育が蓄積してきた実践的な研究の成果を生かし、「ふるさと学習」など家庭・地域社会と連携した豊かな体験活動を通して、さらには地域の課題に正対したり、貢献したりするなど「ふるさと教育」を推進するとともに、児童生徒の内面に根ざした創造性あふれる教育の充実に努めることが重要である。

これからを生きる子どもたちには、多様な他者と関わりながら多くの課題に向かっていかなければならない。そのためには多様性を受け入れたり、対話を重ねたりするなどが必然となってくる。そのためにも「ふるさと」で培った力を礎とし、未来の担い手として育ててほしいという願いである。

《研究副主題について》

研究副主題である「児童生徒一人一人が他者とながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして」は、へき地・複式教育の特性を積極的に生かし、他者や地域とのつながりを通して「生きる力」の伸長を図っていくことを目指している。へき地・複式教育がこれまで積み上げてきた「学校・学級経営」は家庭・地域社会と一体となった「地域に根ざした学校・学級づくり」であり、「学習指導」は児童生徒が進んで問題をとらえ、他者と協力しながら問題解決していく「主体的・創造的な学び合い」である。へき地・複式教育のプラス面を生かした教育活動は、「生きる力」を育成する観点から、複式学級を有する学校のみならず、全ての学校が推進すべきものとする。

【教育情勢】

振り返って2015年（平成27年）は2つの意味で大きな転換期になっている。1つは、文科省から出された「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引きの策定について」であり、もう1つは「PISA2015」の調査と分析である（後の「OECD教育プロジェクト2030」につながる）。

前者は、今後ますます学校の統廃合が進むことが懸念され、事実そのような状況になってきている。また、上記の通知の後に学校教育法等の一部を改正する法律（小中一貫教育制度の導入に係る法律）が出され、翌年から義務教育学校制度が設立され、学校教育制度が大きく変わってきた。

後者の調査において、日本は科学的リテラシー、数学的リテラシーの分野で過去最高水準の結果を得た一方、読解力の分野においては低下しているという結果が出た。その後、文科省等様々なところで分析が出されている。

また、学校は地域・社会とがパートナーとして連携・協働するためにコミュニティ・スクール等地域学校協働活動が進められ「地域と共にある学校」への転換が図られてきている。

一方、子どもを取り巻く社会は人工知能等IT技術・情報技術の急速な進歩でバーチャルリアリティの世界が広がるとともに、時間の流れが加速度的になっている。豊かな心や人間性を育む観点からは、子どもたちが様々な体験活動を通して生命の有限性や自然の大切さ、多様な考えを受け入れたり、自分の価値を認識しつつ他者と協働することを実感し理解できるようにする機会、文化芸術を体験して感性を高めたりする機会の重要性も指摘されている。また、スマホ等各種SNSによるいじめの多様化、不登校児童・生徒の増加、さらには自殺者の増加等、教育を巡る問題は益々深刻化している。

このような背景を受け2017（平成29）年3月に、新学習指導要領が告示された。少子高齢化の進行、人工知能の進化、経済・文化のグローバル化の加速等、2030年頃の社会を見据え、その先に豊かな社会を築くために教育が果たすべき役割とは何かという視点で学習指導要領が改定され、2022年をもって小・中・高全ての校種で完全実施された。

ところが、2019（令和元）年に新型コロナウイルス感染症が全世界を覆い、これまでにない対応を学校は迫られることとなった。あわせて、文科省はこれまで準備してきたGIGAスクール構想を打ち出し、児童生徒一人一端末を配付した。これにより、一気にICTを活用した授業が進み、その実践の普及と蓄積、成果が求められることとなった。現在、文科省をはじめ本連盟もその一翼を担う取り組みを推進している。

【現行学習指導要領のねらいとへき地教育】

現行学習指導要領は、前回改定において重視された学力の三要素のバランスのとれた育成や言語活動や体験活動の重視等については、引き続き充実を図る。

一方で、子どもたちの現状や課題に的確に対応していくためには、「生きる力」をより具現化し、どのような資質・能力を育むことを目指しているのか明確にしていくことが求められている。そのためには、「何を学ぶか」だけでなく「何ができるようになるのか」「どのように学ぶか」等を含めた「学びの地図」としての枠組みを考えていくことが必要である。

また、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子どもたちの資質・能力を育ていくためには、教科等横断的な視点で教科内容を組織的に配列し、人的・物的資源を地域等の外部の資源も含めて活用するなど「カリキュラム・マネジメント」の確立を家庭・地域と連携・協働しながら実施し、不断の見直しが求められる。

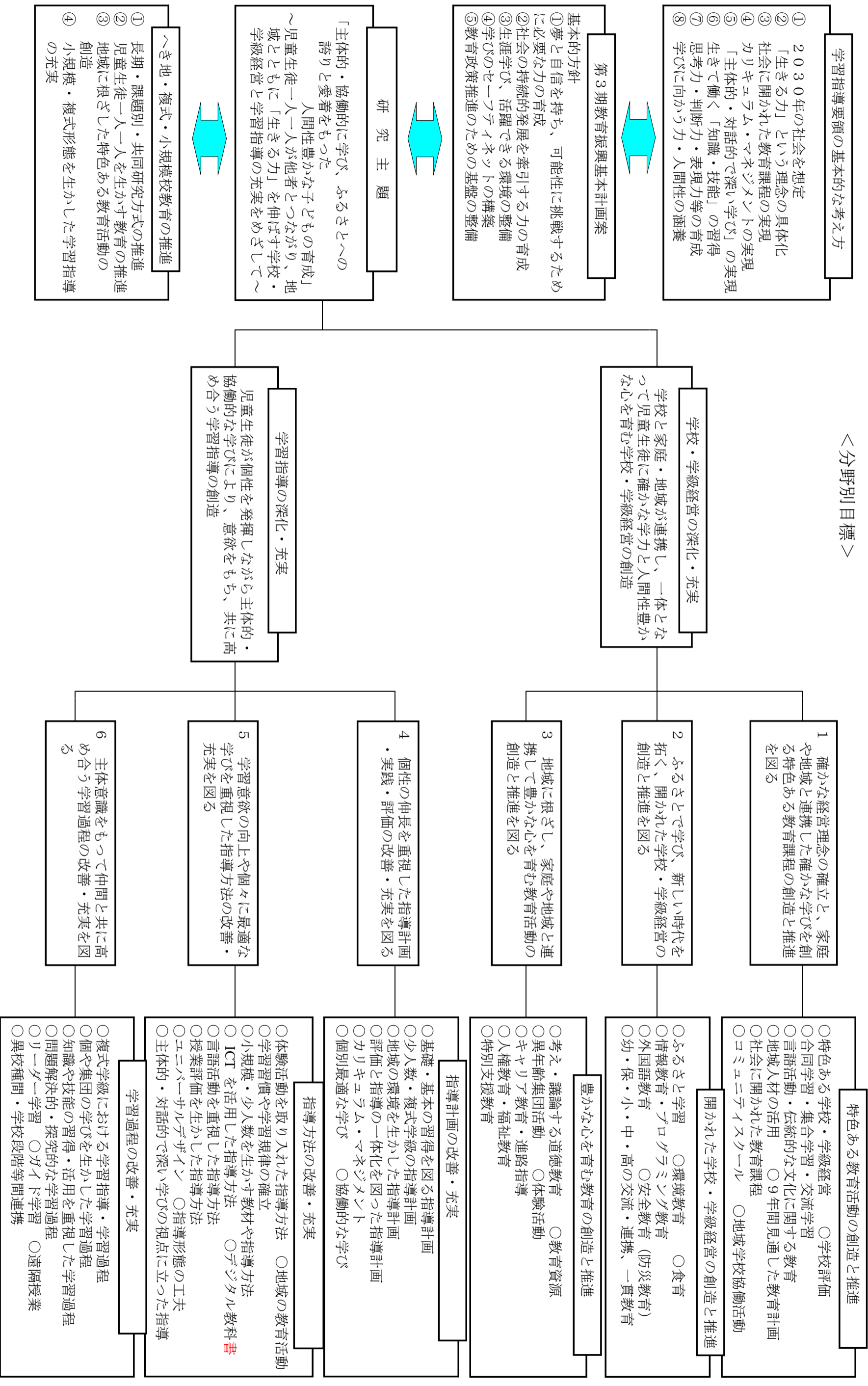
さらに、生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善も求められている。しかし、この家庭・地域との連携は、へき地・複式・小規模校では既に取り組んでいることであり、多くの実践を残している。

へき地・複式・小規模校における教育も学習指導要領の趣旨を的確に捉えるとともに、子どもたちが未来の創り手となるよう、子ども自身が学習の主体者となり、多様な価値観の中、自ら課題をとらえ、考え判断し表現し、他者と協働しながら解決に向けて取り組むことができる能力を育成するという展望をもつ必要がある。さらに、地域や保護者の願いを踏まえ、より一層地域に根ざし、地域に開かれた教育課程を展開すること、

児童生徒が身の回りから様々な課題を見つけ、自然や社会に学び、郷土を愛する教育によって、地域の発展を願うとともに、国際社会に生きる資質を養うこと、身近で豊かな自然に対してそのよさを守り育てると共に、地域環境における状況を適切に捉え、地球や自然環境をいたわる豊かな心を育てることなどが重要である。

我々は、「へき地に教育の原点がある」「へき地にこれからの教育の展望がある」との言葉をかみしめ、自信と誇りをもって教育実践に向かう熱意が大切である。また、「地域に根ざした教育」「地域に開かれた学校」の意味を踏まえ「生きる力」を育成する教育理念の実現のため、児童生徒一人一人を伸ばす教育、豊かな自然を活用した体験学習、家庭・地域社会との密接な連携による教育活動を取り入れた積極的な実践研究が推進されることを期待している。

III 第10次長期5か年研究推進計画の全体構造



IV 6 課題：課題把握と解決のために

学校・学級経営の深化・充実

課題1 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校においては、家庭や地域と連携して基礎的・基本的な知識や技能の習得に向けた確かな学びを創るために、児童生徒や学校、地域の実態に応じた教育計画・教育課程の改善・充実を進めることや、積極的に家庭や地域に情報を発信し、連携を図ることが大切である。さらに、その特性（三特性；へき地・小規模・複式形態）を生かすために、学校・学級経営の構造を明確にして、特色ある教育活動の実践を進めることが必要である。

また、「生きる力」を育成する教育理念を実現するために、「へき地に教育の原点がある」という言葉の意味するところを踏まえつつ、これまでのへき地・複式教育が積み上げてきた実績を反映させた積極的な研究・実践が重要である。

したがって、各学校においては、各教科の指導や言語活動、伝統や文化に関する教育、総合的な学習の時間等を充実させ、児童生徒一人一人の個性や能力に応じた学習指導（個別最適な学習）を展開し、教職員が協働して確かな学びを創るための特色ある教育活動の充実を図ることが必要である。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①学校の教育目標の達成に向け、児童生徒の確かな学びを創る経営の創造と推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の教育目標の具現化に向け、児童生徒に基礎的・基本的な知識や技能の習得と活用を図るための創造的な経営計画の作成と実践研究に努める。 <p>②へき地三特性を生かし、地域に根ざした特色ある教育課程の創造と推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校や地域の特性を生かし、児童生徒一人一人の思考力、判断力、表現力等を育む教育課程の編成とその実践に努める。 ・家庭や地域と連携・協働する開かれた教育課程の編成とその実践に努める。 <p>③児童生徒一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年や個人差を配慮し、個性を生かす教育活動の充実に努める。 ・地域の自然や生涯学習関連施設の活用、地域の人材との交流を取り入れ、児童生徒の興味・関心を高め、学習意欲の向上を図った教育課程の編成とその実践に努める。 ・小規模・少人数の利点を生かした合同学習、集合学習、交流学习の充実に努める。 ・教師力の向上を目指す校内研修の充実に努める。
研究内容	<p>○特色ある学校・学級経営 ○学校評価</p> <p>○合同学習・集合学習・交流学习</p> <p>○言語活動・伝統的な文化に関する教育</p> <p>○地域人材の活用 ○9年間見通した教育計画 ○社会に開かれた教育課程</p> <p>○コミュニティスクール ○地域学校協働活動</p>

課題2 ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校では、生涯学習の基礎を培うとの観点から、変化の激しい社会を主体的に切り拓き、心豊かにたくましく生きる力をもった児童生徒を育てていくことが求められている。

また、多様性、マイノリティ等新しい時代の中で、自己を確立し心豊かにたくましく生きていくためには、ふるさとで育ってきた自分を意識し、ふるさとに誇りをもつことが重要である。

したがって、各学校においては、家庭・地域との連携を強化し、家庭・地域の教育力を積極的に活用することにより、ふるさとへの関心を高めるとともに、新しい時代に対応した教育（外国語活動、情報教育、安全教育等）を充実させた経営を創造することが必要である。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①ふるさとへの愛着と誇りの育成を図る学校・学級経営の創造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然や文化、歴史、産業、人材等地域の教育力を活用した教育活動を充実させ、ふるさと学習等を通じて、ふるさとを愛する心、ふるさとの発展に尽くそうという心等のふるさとを思う心を育てる指導に努める。 <p>②新しい時代を豊かにたくましく生きる力を育成する経営の創造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境や食育、安全、防災への関心を高め、自ら意欲的に課題を解決する教育の創造に努める。 ・情報化に対し、情報モラル等の育成を含めた情報活用能力の育成に努める。 ・外国語や外国の文化などに親しむ教育の創造とその計画化に努める。 <p>③異校種間・学校段階間との交流・連携等を通じた豊かな教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三特性をふまえた近隣校及び異校種間・学校段階間連携等、社会の変化に対応できる開かれた教育課程の編成及び実施に努める。 ・幼・保・小・中・高一貫教育の推進・充実に努める。
研究内容	<p>○ふるさと学習 ○環境教育 ○食育</p> <p>○情報教育・プログラミング教育</p> <p>○外国語教育 ○安全教育（防災教育）</p> <p>○幼・保・小・中・高の交流・連携、一貫教育</p>

課題3 地域に根ざし、家庭や地域と連携して豊かな心を育む教育活動の創造と推進を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校では、「学校が地域を育てる」あるいは「地域が学校を育てる」といった特質があり、家庭や地域が一体となった教育が行われている。学校には家庭と地域との三者が連携し、ふるさと教育を大切にしながら、心豊かな児童生徒の育成を推進していくことが求められている。

そのため、地域の特性や環境を生かした教育課程を編成・実施し、児童生徒一人一人の個性や能力に応じた教育活動を、各教科・道徳、特別活動等の関連を図りながら計画的に実践していくことを通じて、豊かな心を育成していくことが重要である。

したがって各学校においては、地域と一体となった主体的な活動を通じて、人間尊重の精神を高め、郷土理解を深め、社会性を培う教育活動の充実を図ることが必要である。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①地域との連携を密にし、豊かな心を育む教育の創造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や地域と連携し、自然や歴史風土、伝統文化、人材等、多様な教育資源を活用し、ふるさとに愛着をもち大切にするなど豊かな心を育成する指導計画の工夫に努める。 ・家庭や地域の教育力を積極的に活用し、児童生徒に育むべき力や、地域のもつ課題等への関わりをもたせるような学習内容を展開する。 <p>②伝統と文化を継承・発展させ、個性豊かな文化を創る教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や地域との連携を図りながら、豊かな体験活動（集団宿泊、職場体験、奉仕活動、自然体験、文化芸術体験など）を充実させ、道徳性や望ましい勤労観・職業観の育成に努める。 ・児童生徒が身近な人々との交流や体験から、豊かに学び地域に関わろうとする実践的な態度を育てる。 <p>③人間尊重の精神に基づいた教育の指導計画の充実と教育活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域と一体となった主体的な活動を通して、人権教育や福祉教育等についての理解と実践の充実に努める。 ・特別支援教育についての理解と実践の充実に努める。
研究内容	<p>○考え・議論する道徳教育 ○教育資源</p> <p>○異年齢集団活動 ○体験活動</p> <p>○キャリア教育・進路指導</p> <p>○人権教育・福祉教育</p> <p>○特別支援教育</p>

課題4 個性の伸長を重視した指導計画・実践・評価の改善・充実を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校では、各教科の目標や特性を踏まえつつ指導すべき内容を重点化し、児童生徒一人一人が意欲的に学習に取り組みながら、基礎的・基本的な内容を確実に定着させる指導計画を作成することが大切である。

そのためには、学校をとりまく豊かな自然や地域性などの教育資源を有効に活用しながら、児童生徒一人一人の知的好奇心や探求心を喚起し、主体的に課題を解決しようとする学習活動を展開することが必要である。

したがって、各学校では児童生徒一人一人に「わかる喜び」が味わえるように、少人数ならではのよさが生きる指導体制や指導方法、評価の工夫・改善を図りながら「何ができるようになったか」を教職員が共有し、一人一人の学びの力を育てていくことが重要である。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①基礎的・基本的な内容の定着と個性を生かした指導計画の作成や実践の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的・基本的な内容の確実な定着のために、内容を重点化した指導計画や指導方法の工夫・改善を図る。 ・一人一人の習熟度や興味・関心に応じた補充的な学習、発展的な学習、さらには選択や履修等、個に応じた学習の実践を図る。 <p>②地域の教育資源を生かし、主体的・対話的で深く学ぶ指導計画の作成や実践の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科の目標や内容を踏まえ、身近にある地域素材の教材化や地域人材を活用した指導計画の改善・充実を図るとともに、主体的・対話的で深い学びにつなげる。 ・地域の「ひと・もの・こと・自然」を生かし、地域から学ぶとともに地域に発信する主体性を育む。 <p>③各教科の特性や学年差や個人差を踏まえ、児童生徒の発達段階を考慮し、「わかる喜び」を味わうことのできる指導体制や指導方法、評価の工夫と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年差、個人差を考慮した指導体制、指導方法の工夫、改善に努める。 ・目標と指導、評価の一体化を図るとともに、学習指導や評価方法の工夫・改善を図る。 ・教職員全体で「何ができるようになったか」を共有し、一人一人の成長を多面的・多角的に見取り、評価の改善・充実を図る。
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎・基本の習得を図る指導計画 ○少人数・複式学級の指導計画 ○地域の環境を生かした指導計画 ○評価と指導の一体化を図った指導計画 ○カリキュラム・マネジメント ○個別最適な学び ○協働的な学び

課題5 学習意欲の向上や個々に最適な学びを重視した指導方法の改善・充実を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校では、児童生徒の自己教育力の向上を図るために、地域や学校の特性、児童生徒一人一人の興味・関心を生かし、学習意欲を高めるとともに「確かな学力」を身に付ける学習指導を展開していくことが重要である。

そのためには、体験的な学習活動を多く取り入れ、体験を通して学ぶ楽しさや成就感を味わうことができるようにしたり、個々に学び方を身に付けることができるようにしたりする指導方法の工夫・改善を図ることが必要である。

また、小規模・少人数だからできる学習内容の個別化、あるいは小規模・少人数による支障が生じる学習内容の集団化を図るなど、柔軟且つ多様な指導方法を工夫しながら、児童生徒の「自ら学び、自ら考える力」を育てていくことが重要である。

したがって、各学校では小規模・複式学級の特性、地域や家庭の教育力を最大限活用した体験活動やICTの活用、言語活動を重視した指導方法の改善・充実を図るとともに、評価を有効に取り入れた指導方法を追求していくことが必要である。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①三特性を踏まえ、地域の教育環境を活用し、学ぶ楽しさや成就感を体感できる指導方法の改善と充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の「ひと・こと・もの・自然」を生かす体験的な学習、小規模・少人数の利点を生かしたきめ細かな学習活動、「確かな学力」を身に付けることができる指導方法の改善・充実を図る。 ・家庭や地域の教育力を積極的に活用し、地域の魅力に関心をもつ学習内容の充実を図る。 <p>②学習効果を高める個別化・集団化など指導方法の改善と充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人の個に応じた指導方法の改善と充実を図る。 ・ICT機器を含めた教材・教具・教育機器等を効果的に活用した学習を進める指導方法の改善と充実を図る ・言語活動を重視した授業実践等、一人一人が学ぶ楽しさや成就感を味わい、主体的な学び方を身に付ける指導方法の改善と充実を図る。 <p>③児童生徒一人一人が生き生きと学習を展開するための指導方法と評価の改善・充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人の思考に応じた指導方法を工夫し、児童生徒の学習意欲を高める評価の改善・充実を図る。
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ○体験活動を取り入れた指導方法 ○地域の教育活動 ○学習習慣や学習規律の確立 ○小規模・少人数を生かす教材や指導方法 ○ICTを活用した指導方法 ○デジタル教科書 ○言語活動を重視した指導方法 ○授業評価を生かした指導方法 ○ユニバーサルデザイン ○指導形態の工夫 ○主体的・対話的で深い学びの視点に立った指導

課題6 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る

1 課題把握のために

へき地・複式・小規模校では、児童生徒が自分らしさを発揮しながら、課題意識をもって主体的・対話的で深い学びになるよう学習過程を改善・充実をしていくことが大切である。

そのためには、一人一人の能力や適正に応じたきめ細かな学習指導を行い、学年差・個人差に配慮する必要がある。また、間接指導場面において、相互に学び合い、高め合う学習過程の在り方を追求しながら、児童生徒の実態に即した学習を展開していく必要がある。

さらに、これまで培い、蓄積されてきた複式授業の学習過程を基本としながら、柔軟で弾力的な学習指導を行い、児童生徒が「自ら学び、自ら考える力」を身に付けることができるよう教科の特性に応じた問題解決的な学習を取り入れた学習過程の改善と充実を図ることが必要である。

また、幼・保・小・中・高の異校種間・学校段階間連携や市町村の枠を越えた学習においては、これまでにない弾力的な運用と実態に即した教育課程の編成と実施が求められている。

2 課題解決のために

研究の視点	<p>①主体的・対話的で深い学びの視点から、多様な考え方や個人差、学年差に応じた学習過程の改善と充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題をとらえ、学習への意欲や見通しをもって主体的に課題を解決していく力を育てる学習過程の改善・充実を図る。 ・主体的・対話的で深い学びとなる学習過程の改善と一人一人の能力に応じたきめ細かい指導の充実に努める。 ・間接指導場面でのリーダー学習（ガイド学習）等、少人数においても相互に学び合い、高め合う学習過程の在り方を追究する。 ・児童生徒一人一人の発達段階や学年差、個人差に配慮した学習過程の改善と充実を図る。 <p>②教科の特性に応じた問題解決的な学習の指導過程の改善と充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科等の特性や学習集団の実態を踏まえた複式授業の学習過程の柔軟で弾力的な運用の在り方の工夫、改善を図る。 <p>③地域内外の異校種間連携や交流学习により新たな学習過程の改善と充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の特性を生かしながら、単式校や様々な教育研究組織との連携による相互交流、幼・保・小・中・高の異校種連携による系統的な学習内容の充実を図る。 ・小中併置校や市町村枠を越えた学校間連携など、小規模校のもつ特性を生かした学習過程の改善・充実を図る。
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ○複式学級における学習指導・学習過程 ○個や集団の学びを生かした学習過程 ○知識や技能の習得・活用を重視した学習過程 ○問題解決的・探究的な学習過程 ○リーダー学習 ○ガイド学習 ○遠隔授業 ○異校種間・学校段階等間連携

V 研究推進にむけて

1 研究方法

第10次長期5か年研究推進計画においても、課題の解決を目指した長期・課題別・共同研究方式の実践的研究の構成を継承する。

そのため、研究の目標と課題内容や方法を整理・改善し、その明確化を図っていくことが重要である。さらに、研究の視点や研究内容に基づいた実践と成果の検証・考察を通して、充実・発展を図ることが大切である。特に、研究の成果を集約・整理・交付おすることにより共有化を図っていくことが欠かせない。

こうした考えのもとに、全へき連は長期的展望に立って研究実践の深化・充実を図り、その成果と課題を整理・集約して累積・継承・発展を図っていくことを大切にしていかなければならない。

(1) 長期研究方式

全へき連の研究が大きく生まれ変わったのは、第1次長期5か年研究推進計画を開始した昭和49年である。それまでの状況は、各都道府県ごとに研究主題が異なり、研究の方法や成果等に一貫性がなく、次年度への継承も積み上げも明確でなかった。

そのため、各地区の優れた研究も個別的なものに留まり、単発的問題的に終わりがちであった。よって、広く日本全国のへき地・複式教育の教育水準や「質」の向上に至るまでにはいかなかった。

そこで、全へき連では、組織的な研究の抜本的改善の必要生を痛感し、長期的な展望に立ち、「いつまでに」「どのようなことを」「どのようにして」達成するのか、それは「何のために」「何を目指して」進めるかという目標（課題）をもち、その研究実践についての手順を示し、意図的・計画的に研究を発展・充実させようと取り組んだのが、長期研究方式である。すなわち、5年・10年という長期性をもたせ、目標・課題・課題内容・方法等を明確にするための総合的な推進計画を立て、組織的な研究実践の推進に取り組んだものである。

第10次長期5か年研究推進計画においても、これまでの研究経過及び成果と課題を継承し発展させる。そのために、前期3か年は本計画に基づいた実践研究を累積しながら検証を進める《実践・検証期》とし、後期2か年は実践研究を継続しながら、その評価をし、研究を発展させていく《評価・発展期》とする。実践研究を継続しながらも、その成果をさらに深化・発展させ、「いつでも」「どこでも」「だれでも」が実践できるように評価・改善するとともに、長期的展望に立ち、組織的・系統的に成果や課題等を整理・集約し発展させる研究を推進することにした。

(2) 課題別研究方式

へき地・複式・小規模校には、学年編成を基本としている我が国の教育制度、あるいは指導理念をそのまま取り入れることのできない学校・学級経営並びに学習指導上の課題が存在している。

学校・学級経営面では、地域の教育課題を踏まえた教育計画を立案する場合、当然都市や市街地の学校と異なる配慮や工夫が必要となる。つまり、少人数のために近隣校との集合学習や交流学習等を行い、教師の協業化を進めるなどの配慮が必要である。また、地域の文化センターとしての機能をもつ学校としては、家庭や地域との密接な

連携が必要である。さらに、複式学級は2個学年による編成であることから、経験や能力等についての配慮が必要になるなど、学校・学級経営上多くの困難をもっている。

学習指導の面では、複式授業・少人数学級という条件から学年別指導、同内容指導、類似内容指導など、独自の指導計画と指導方法の創意工夫が必要となる。すなわち、へき地・複式・小規模校の課題を解決するためには、学校・学級経営の視点から教科・特別な教科「道徳」・特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動の全領域において、地域の教育課題や教育力と密着した総合的な研究が求められることになる。したがって、単に教科別や領域別の研究のみでは、へき地・複式教育の抱える課題の解決や地域の教育力の活用にはいたらないと考えられる。そこで学校・学級警衛と学習指導を言ったとして取り上げる中で研究実践を推進することが重要である。そして、へき地・複式教育jにとって中核となる課題や内容を明確にし、それを窓口に研究実践を開始し、課題解決を目指す総合的な研究方法が有効であり、実効性があると考え、課題別研究方式の取組を推進していくこととしている。

課題別研究方式では、次のことを基底に研究推進を行う。

- ①へき地・複式・小規模校の児童生徒のもつ課題を適切に受け止め、改善するとともに、一層の育成を目指す視点から教育研究を構築していく。
- ②そのためには、教科や学年の枠内だけの研究実践では不十分であることから、「学校・学級経営」と「学習指導」という2つの分野で研究を深化・充実させていくとともに、両分野の連携を密にしていく。
- ③具体的な経営や授業の在り方については、共同研究の利点を大いに活用しながら、各地区・各学校での優れた実践を掘り起こし、理論的に整理し、その積み上げを図り、「いつでも」「どこでも」「だれでも」ができるようにしていく。
- ④研究にマネジメントサイクルP D C A（計画・実践・評価・改善）を取り入れ、実践の過程や結果を本計画の2分野・6課題に照らして検証・評価し、研究の成果・課題を明確にするとともに、成果の累積、実践の改善に活用していく。

以上を重視し、今日的課題や地域の教育課題を集約した6課題を設定し、地域に根ざした確かな教育活動を展開し、課題解決を図ることにした。

(3) 共同研究方式

かつては、研究の推進や研究の成果を単発的な研究、名人芸的な授業に終わらせていた。しかしながら、現在は「全国は一つ」として同士の仲間の英知を結集し、共同化、協業化による組織的・計画的な実践研究を進め、その成果を共有財産として累積・継承・発展させていくという共同研究方式の立場をとって進めている。

組織としても、全国を7ブロックに分け、全国大会の開催、分散会での発表等各方面の様々な課題や研究等について協議し、共通理解と協働体制の構築を図っている。共同研究の効果をさらに高めていくために、研究実践及びその成果と課題を公表・交流・協議する場を大切にしていくことにより、成果と課題の共有化を図り、研究の高め合いを目指している。

2 三特性について

(1) へき地性

へき地性については、課題が指摘され、その解消や克服のための実践研究が推進されてきた歴史がある。しかし、へき地の状況も時代とともに変化し、住宅の改善、都市的生活様式の普及、情報手段の発達等により、都市との差違が明確でなくなってきた。

ている。また、児童生徒の学習意欲・学習技能・発表意欲等学習に対する動機的側面についても、へき地校と非へき地校の差はほとんど認められなくなっている。

しかしながら、全く差異がなくなった訳ではない。地域による違いはあるものの、以下のようなへき地校児童生徒の長所も数多くあげられてきている。

- ①明朗で活発である。
- ②純粹で素朴である。
- ③礼儀正しく仲がよい。
- ④勤労をいとわず根気強い。
- ⑤協調性がある
- ⑥思いやりや優しさがある など

また、北海道教育大学の玉井康之氏（※1）は、へき地・小規模校のメリットとして

- ①教員と児童生徒、児童生徒どうし、学校と地域の関係の密接さと信頼関係の形成しやすさ
 - ②地域社会の共同性の学習しやすさ
 - ③問題行動の少なさ
 - ④児童生徒の協力的な姿勢
 - ⑤個々の児童生徒の到達状況に合わせた学習指導・生活指導のおこないやすさ
 - ⑥自主学習・集団学習習慣の啓成のしやすさ
 - ⑦リーダーとしての活躍の場 等
- をあげてる。

この中で、へき地校児童生徒の長所にある思いやりや優しさなどの「心の豊かさ」は、生涯にわたって大切な人間性の基盤となる資質であり、これからの時代に一層の育成を目指さなければならない資質でもある。

今こそ「へき地劣性」の考え方を解消し、へき地のもつ教育的価値に視点を当て「へき地優性」の考え方に立った積極的な教育課題解明の研究と実践が重要である。

※1 玉井康之 「子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性」
教育新聞社 2006年

(2) 小規模性

学校教育法施行規則では、小学校は11学級以下を小規模校として扱い、中学校はこれに準用するとしているが、へき地・複式教育では1学級の人数が20人未満の学校も含めて研究、実践を推進する必要がある。

へき地・小規模校では、1学級の人数の少ないことを優位な条件としてとらえ、児童生徒一人一人の特性を把握し、それを指導に生かすことが重要である。

特別活動で主体的・自治的な活動や異年齢集団による活動、近隣校との合同学習や集合学習など、地域に根ざした教育活動や特色ある教育活動を成功させているのは、児童生徒一人一人が主役となって活躍していることによるものであり、小規模校のよさはここにある。また、地域の環境（自然・社会・人間）を生かした体験的な学習を積み上げ、自然や地域と触れ合いを通して、豊かな感性や郷土愛が培われている。また、総合的な学習の時間や学校行事等での地域と連携し協働した学習により、課題解決力や表現力・コミュニケーションの向上も報告されている。

地域に根ざした教育の推進を図る観点から、小規模校の特性を以下し、児童生徒一人一人が主役になるとともに、地域の教育力の一層の活用を図ることが重要である。

さらに、児童生徒の側に立った教育を志向し、これからの児童生徒に何が大切か、何に価値があるかを追求し、発達段階と適時性を考え、困難な条件をおり超える方法を創造しながら、へき地の学校だからこそできる教育、小規模校だからこそできる教育、複式学級だからこそできる教育を推進することが重要である。

(3) 複式形態

学級編制基準により2個学年が1学級を編制して教育活動を営む学級を「複式学級」と呼び、次のような特質があげられている。

- ①学年を越えて、能力が分布することから、学年差とともに学年を越えた個人（能力）差という観点でもとらえなければならない。
- ②教育課程編成の特例により、学年別によらない指導計画を工夫することができる。
- ③2個学年の児童生徒に対応した指導計画や学習過程を工夫しなければならない。
- ④上学年とした学年を交互に体験することになり、よきリーダーとよきフォロワーの立場が経験できる。

この異年齢集団における体験は、人間形成の上でも大切な要素であり、3つの特性の中でも最も大きな要素である。

へき地・複式・小規模校では、単級複式学校以来、効率的な複式教育を目指して取り組んできている。そして、学校や地域に即して研究・実践を続け、指導方法について多くの定型を生み出してきた。そして、それらを「いつでも、どこでも、だれでも」が活用できるように努めてきている。

児童生徒を愛し、地域を愛した全国の複式教育に携わる教師にとって、苦しさに耐え、たくましく生きる意欲を養い、創造力を培ってきた諸先輩の意志を継承することが大切である。

3 地域に根ざす教育

それぞれの地域には、その地域ならではの歴史と伝統があり、児童生徒は、その教育環境の中で育っている。従って、地域の特性を生かし地域に根ざす教育の重要性は言うまでもなく、学校と地域が密接な連携のもとに教育経営が行われることが大切である。

(1) 意義

児童生徒の豊かな人間形成を図るには、家庭や地域の果たす役割は大きい。学校はそれらに積極的に働きかけるとともに、学校教育に対する理解と協力を求めていくことは極めて重要であり有効である。さらに、地域の実態や抱えている課題を十分に検討・共有化していくとともに、学校規模、教職員の組織、地域の教育力（自然や文化、施設、人材等）学校のもつ教育諸条件を十分考慮・活用していくことが大切である。

最近では、従来教育上マイナスと考えられていたへき地性といわれる地域の特性を見直すことにより、へき地の特性を生かした積極的な教育活動を展開する学校が多く見られる。経済的・物質的に豊かであるということと、教育的に豊かであるということとは別物である。それと同様に、経済的・物質的に豊かではないということが、すなわち教育的にマイナスであることを意味するものではない。「へき地に教育の原点がある」「へき地にこれからの教育の展望がある」との言葉をかみしめ、学校の果たす使命を自覚し、今日的な課題や地域の教育課題を的確にとらえ、その地域だからできる教育、「生きる力」をもった児童生徒を育成する学校経営を強力に推進することが大切である。

(2) 地域のもつ教育課題

それぞれの地域が学校教育に期待することは多様であるが、次のような教育課題が存在すると考える。

- ①地域の社会や自然環境の実態を基盤とした現状認識と将来展望から、文化・産業・

経済等の変化に対応し主体的にかかわる能力の育成

- ②家庭や地域との連携を図り、郷土意識と連帯感を基調とした地域づくりにかかわる実践を通して、郷土を愛する心豊かな人間性の育成
 - ③美しさと厳しさをもった自然に触れ、多様な試練と環境の厳しさに耐えて生き抜くたくましい実践力と地域の歴史・伝統を尊重する心の育成
- 各学校・地域の実態の違いにより、その学校独自の課題解決の手立てがあると考えられる。しかし、その際に次の点を大切にしたい。
- ①学校・地域の置かれている自然や社会、文化、伝統等の条件を十分に生かす。
 - ②解決の糸口となる事柄を絞り、重点化して実践する。
 - ③教職員一人一人のもつ特性を十分に生かして教育を推進する。
 - ④常に児童生徒のためになることを考えた実践を進める。

(3) 地域の変貌と課題への取組

児童生徒が生まれ、育ち、そして生活をしている地域が大きく変貌しつつある。すなわち

- ①交通手段の発達、情報の親展、伝統的な生活様式や習慣の希薄化など、へき地・複式・小規模校を取り巻く環境が大きく変わり、新しい価値と古い価値が混在した状況にある。
 - ②豊かな自然環境を利用した開発が進み観光地、静養地化するなど地域の産業基盤が大きく変化したり、衰退している地域もある。
 - ③若年者の都市への流出傾向が止まらず、農村漁村等は後継者不足となり、一段と高齢化・過疎化が進み、経済的・社会的に厳しい状況にある。
 - ④保護者や地域住民の多様な価値観と生活様式の変化などにより、へき地の児童生徒たちの特性とされてきた自律的なたくましが薄れ、依存性が強くなる傾向がある。こうした傾向の中で、「ふるさとで心豊かに学び、未来の創り手となる」ために、以下のことに特に留意して取り組む必要が有る。
- ①保護者や地域住民の願いを踏まえ、より一層地域に根ざす養育の推進をするために学校・家庭・地域が十分連携を図り、相互の教育力を生かし高め合いながら取り組む。
 - ②学校を取り巻く地域の環境は、「狭隘の宝庫」である。児童生徒一人一人が自ら課題を見出し、その自然や社会に学び、地域を愛し、地域の発展を願うとともに、国際社会に生きる資質や能力を培う。
 - ③児童生徒一人一人が身近にある豊かな事前や文化・伝統の中で、様々な体験活動を通し自然に対する豊かな感受性を涵養するとともに、環境の保全等に対する興味・関心を培う。

現代社会においては、都市化、少子化の進展や、テレビゲーム、パソコンなどの普及により、大勢で遊ぶ、友達と語り合う、他人と協力し合うといった多様な人間関係の中で、社会性や対人間関係能力を身に付ける機会が減ってきている。また、学校や地域社会といった本来社会性を育成する場で社会性が育まれにくくなっていることお指摘されている。

文部科学省の委託研究である、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの「社会性の基礎」を育む「交流学习」・「体験学習」の研究によると、意図的・計画的な「異年齢勇断の交流活動」を確実に実施することにより、「社会性の基礎」を育成することができると発表している。

また、学級や学年を越えた多様な「かかわり合い」なしに、学級担任が学級内だ

けで「社会性の基礎」を育てることは困難であると結論づけている。

このことは、私たちが取り組んでいるへき地教育の推進にあたって、大変意義深いことである。あたかも、少人数だから社会性が育たない、他者とのコミュニケーション力が育ちにくいといった事を憂慮し、統廃合を推し進める地域もあるが、へき地の子どもたちは、日頃より、様々な他者と関わり、人と触れ合うことの楽しさや集団の一員として役割を果たすことの充実感を感じている者が多い。また、人の世話をする、されるといった異年齢集団の中で感じる自己有用感を自然に身に付けている者も少なくない。このことは多人数だから獲得できるというものではない。

「交流学习」・「体験学習」等が古くから実践・研究されてきた「へき地校」には、今、社会で必要とされている教育の最先端に行く実践がなされていることを誇りに思い、社会に発信していくことが期待される。

「地域に根ざす教育」「地域に開かれた教育」の意味するところをしっかりと踏まえ、へき地の児童生徒にこそ確かな「生きる力」を実現するため、児童生徒一人一人のよさを伸ばす教育、豊かな自然を活用した体験的な学習、家庭や地域と密接な連携をし、さらに協働する教育活動を具現化する研究実践が期待される。

VI 全国研究大会の開催

この第10次長期5か年研究推進計画の全国大会予定ブロック（県）は、以下の通り。

- | | |
|--------------------------|-----|
| ○令和6年度（第73回）・・・中四国ブロック | 岡山県 |
| ○令和7年度（第74回）・・・関東甲信越ブロック | 新潟県 |
| ○令和8年度（第75回）・・・東海北陸ブロック | 岐阜県 |
| ○令和9年度（第76回）・・・九州ブロック | 福岡県 |
| ○令和10年度（第77回）・・・東北ブロック | 県 |

「教育の原点はへき地にあり」と言われる。これは、文化的・社会的条件に恵まれていない地域ではあるが、美しい自然や温かな地域住民に囲まれた中で、教師や友達と心を通わせ助け合って学習していくという深い人間的接触を通して、児童生徒一人一人が自己実現を図っていく教育が進められているからである。

「全国は一つ」、会員一人一人が、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りや愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」に向けて日常実践に励まれることを切に願い、合わせてこの巣教育研究推進計画を参考に力強く教育活動を展開され、公表されることを期待する。



連盟結成時より第10次長期5か年研究推進計画までの研究の展開（図）

第1次研究（昭和49年～58年）												第2次研究 昭和59年～63年								
研究期			典型化期				検証期					典型化期			定型化期					
昭和	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 研究の成果を 型にして残す ↓ 型にしたものを 高めていく ↓ いつでも、どこでも 誰でもが活用 </div>								
回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11									
開催地	北海道	島根	福井	山梨	山形	山口	福島	熊本	群馬	奈良	愛媛									
昭和	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48									
回	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22									
開催地	岩手	三重	岡山	富山	宮城	宮崎	岐阜	青森	新潟	北海道	徳島									
昭和	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59						60	61	62	63
回	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33						34	35	36	37
開催地	東京	広島	秋田	和歌山	大分	愛知	北海道	高知	長野	鳥取	山形						京都	福岡	静岡	香川
ブロック	関東甲信越	中国	東北	近畿	九州	東海北陸	北海道	四国	関東甲信越	中国	東北						近畿	九州	東海北陸	四国
<p>【研究主題】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>《S48年までの主題》</p> <p>開催地の都道府県の主題、課題をもとに開催</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>《第1次研究主題》</p> <p>開催地の都道府県の主題、課題をもとに開催</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>《第2次研究主題》</p> <p>たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子どもの育成</p> </div> </div> <p>【課題】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>※昭和37年までは 主に教科指導の課題</p> <p>※昭和48年までは 主に学校経営の課題</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>※2領域3分野</p> <p>①学校・学級経営の創造</p> <p>②指導計画の創造</p> <p>③指導方法・様式の創造</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>※2領域3分野</p> <p>①学校・学級経営の現代化</p> <p>②指導計画の最適化</p> <p>③指導方法・様式の最適化</p> </div> </div>																				

第7次研究（平成21年～25年）

実践・検証期			評価・発展期		<ul style="list-style-type: none"> ・教育現場の模範・参考となりうる研究 ・研究のより確かな実勢と理論の検証を積み重ねた共通化した一定の研究 <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">現場の実態に合わせ活用し 応用できる研究</p> <p style="text-align: center;">《第7次研究主題》</p> <p style="text-align: center;">ふるさとでの学びを生かし、新しい時代を築く心豊かな子どもの育成</p>
21	22	23	24	25	
58	59	60	61	62	
鹿児島	広島	北海道	和歌山	三重	
九州	中国・四国	北海道	近畿	東海・北陸	

第8次研究（平成26年～30年）

実践・検証期			評価・発展期		<p>【研究の深まり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとを教育資源として学び、地域 とつながりながら生きる力を培う教育の研究 ・時代のニーズに合った教育の実現 <p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> ・21世紀の我が国を切り拓いていく人間力を育む教育の研究 <p>【研究の広がり】</p> <p>個人・学校（市町村）  ブロック（都道府県）  新聞・書籍（全国）</p> <p style="text-align: center;">《第8次研究主題》</p> <p style="text-align: center;">ふるさとでの学びを生かし、新しい時代を築く心豊かな子どもの育成</p>
26	27	28	29	30	
63	64	65	66	67	
群馬	熊本	青森	高知	京都	
関東甲信越	九州	東北	中国・四国	近畿	

第9次研究（平成31年～35年）

実践・検証期			評価・発展期		<p>【へき地教育振興法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の研修の確保 → 分散会や授業のライブ配信・ワンモア配信 <p>【学習指導要領改定の基本方針の推進】</p> <p style="text-align: center;">《第9次研究主題》</p> <p style="text-align: center;">ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成</p> <p>※2分野6課題 35の研究内容</p>
1	2	3	4	5	
68	69	70	71	72	
長野	富山	宮崎	山形	兵庫	
関東甲信越	東海・北陸	九州	東北	近畿	

第10次研究（令和6年～10年）

実践・検証期			評価・発展期		【令和の日本型学校教育の推進】																				
6	7	8	9	10		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p style="text-align: center;">《第10次研究主題》</p> <p>主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成</p> </div> <p>2分野6課題 48研究内容</p>																			
73	74	75	76	77																					
岡山	新潟	岐阜	福岡																						
中国・四国	東海・北陸	関東甲信越	九州	東北																					
<table border="1" style="width: 100%; height: 100%;"> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> </table>															<table border="1" style="width: 100%; height: 100%;"> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> </table>										
<table border="1" style="width: 100%; height: 100%;"> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> </table>															<table border="1" style="width: 100%; height: 100%;"> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td></tr> </table>										